

# 当事者の語りの戦略

## —Abbas Khider の小説の語りの構造—

### Strategy of Personal Narratives: The Narrative Structure of Abbas Khider's Novels

浜崎桂子  
Keiko HAMAZAKI

#### キーワード

難民とそのナラティブ、ドイツにおける庇護申請者、語りの信憑性  
refugees and their narratives, asylum-seekers in Germany, credibility of narratives

**Abstract:** The personal narrative and its function are explored in various research fields, including sociolinguistics, psychology, cultural anthropology, and intercultural communication studies. Literary texts, although fictional, can also be analyzed as personal narratives that maintain certain relationships to social and historic reality, especially when the author writes about their own experience.

This essay analyzes the narrative strategy of literary texts by Abbas Khider, who fled Iraq after being imprisoned because of his political activities against the Hussein regime, and who found asylum in Germany. In his five novels, the German-language novelist writes about the life of the politically oppressed under dictatorship and the life of asylum-seekers in Europe. His narrative strategies, including framing narrative, multiple narrative levels, and unreliable narrators, lead the reader to reflect on what is being told as well as on alternative stories which are not being told. Other strategies, such as humorous descriptions of the life of refugees as well as ironic remarks on the Iraqi dictatorship and western refugee policy, are to be understood as an attempt to deconstruct stereotypes of the politically oppressed which are common among western readers.

Khider's narratives, using these strategies, are fictions based on historic grounds, but give the reader alternative access to real experiences of minorities such as asylum-seekers.

## 1. フィクションのナラティブ

自分の経験や考えについて他者に向かって語ることは、他者との関係の中で社会的生活を営もうとする人間の根源的な欲求のひとつだといえるだろう。灘光・浅井・小柳(2014)は、異文化コミュニケーション学における質的研究の主要な方法を概観する論文において、ナラティブ分析の考察に一節を割き、「ナラティブ」という概念の多義性を注意深く整理している。社会言語学、心理学、文化人類学、歴史学など幅広い学問領域で用いられることが、その定義を重層的にしていると考察しつつ、同論文はインタビューによる「語り」に焦点を絞り、「ナラティブ」概念の多義性のひとつの例として、野口(2009)に依拠しながら『語る』という行為と、行為の産物としての『物語』(灘光・浅井・小柳、2014、72)の両義性を挙げている。また、「ナラティブ」に対するアプローチは多様でありながら、「語り手の主観的世界に注目する」、「現実とは言語活動によって構築される」、「現実とは一枚岩ではなく複数の意味が同時に存在する」という3点に「共通理解があるように思われる」と述べている(灘光・浅井・小柳、2014、73)。

上記の考察にフィクションの語り、すなわち文学テキストは含まれていないが、言語によって構築、創造されるフィクションもまた、ナラティブ分析の対象になりうるだろう。フィクションの語りへのアプローチもまた、フィクション世界の中の「現実」を「語り手の主観的世界」とするととらえ、「現実」が「言語活動」によって構築されるそのプロセス、「一枚岩ではなく複数の意味が同時に存在する」解釈の多様性がどのように可能となるかに注目するのである。

本論では、フィクションとして書かれている文学テキストを対象に、そのナラティブを分析する。文学テキストもまた、現実の社会や当事者の経験と密接な関係をもつことが稀ではなく、オーラル・ヒストリーやエゴ・ドキュメント(長谷川、2020)との接点がある。とくに、その作者が特定の経験の「当事者」として書く場合、それがフィクションであっても「当事者の語り」だといえることができる。とはいえ、作品として書かれるテキストの語り方や物語の構造などは、高次に意識的に行われていることが想定される。そこで本論文では、文学テキストもまたコミュニケーションの一形態であるとしてとらえつつ、「ナラティブ」という概念を、おもに「語り方」と「物語を構築する方法」に重点を置いて用いることとする。具体的には、語り手の位置、語られる「事実」への距離に注目し、文学テキストのナラティブを、当事者の経験を伝えるためのひとつの戦略として位置づけるのがその目的である。

## 2. イラク出身のドイツ語作家Abbas Khiderが「語る」ことについて

本論で扱うのは、イラク出身のドイツ語作家Abbas Khiderのテキストである。1973年バグダッドに生まれたKhiderは、フセイン政権下のイラクにおいて政治犯として逮捕された経験を持ち、1996年にイラクから逃亡、ヨルダンやリビアを経由して2000年にドイツに入学、その後庇護権を得たいわゆる政治難民である。入学後にドイツ語を習得、ミュンヘンおよびポツダムの大学で哲学および文学を学んだ彼は、ドイツ語で文学作品を書き始め、これまでに小説を5編、ドイツ語にまつわるエッセイを1冊発表、2013年には優れた亡命文学に授与されるヒルデ・ドーマン文学賞、2017年には複数の言語、文化を行き来する作家に授与されるシャミツォー文学賞を受賞するなどの評価を受けた、現代の重要なドイツ語作家のひとりである。

これまでの彼の作品は、一貫してイラク出身の人物を主要な登場人物とし、戦争や独裁政治下での生活、逮捕や拷問、逃亡生活をテーマとして扱っている。しばしば投げかけられる、彼の作

品は自伝なのかという問いに対し、Khiderはあるインタビューで「すべての登場人物はフィクション」であるが、扱われるのは「現実のテーマ」であり、「自分が書いているのは文学」であるが、「創造されたものであっても」、「自伝的」(Kretschmer, 2013)なものだと答えている。2020年の別のインタビューでは、書くことによって「歴史的事件、戦争、抵抗運動」を「登場人物の目を通して新しく理解」するが、書き手は、その経験を「描写することで傷つきやすくなり、自分の皮を剥ぎ取ることになる。そして最後には、何が自伝的で何がそうではないのか、自分でも区別ができなくなる」(Khider, Mayer, & Salavati, 2020)と述べている。語ることによって痛みを体験する作業は、自分を外界から保護する表皮を失うことであり、それは、他者と自分の境界が曖昧なものとなり、作中人物の経験が作者のそれと融合し、新たな「自伝的」な要素になるということだと言おうとしているのだろう。

苦痛を伴う経験について「適切に描写することは可能なのか」という質問に対して、Khiderは、アウシュヴィッツの生還者であるPrimo Leviに言及しながら答えている。Leviが『これが人間か』(“Se questo è un uomo”, 1947)において、「経験の残酷さをそのままに過酷に、ドキュメンタリーのように」(Khider, Mayer, & Salavati, 2020)書いたことを評しつつ、Khiderは、これが精神的に非常な痛みを伴うものだと述べ、言語を絶する経験をリアルに書くことを選んだ書き手は、自死を選ぶことが多いとさえ指摘している。それに対してKhiderが用いる戦略は、自身の経験から距離を取りユーモアをもって語ることである。それが、物語とともに長く生きるための「生き残りの戦略」(Khider, Mayer, & Salavati, 2020)であると、これもまたおそらく彼流のユーモアとして答えている。作家としてのKhiderは、「残酷さを、文学として明るいものに書き換える」(Cakir, 2015)ための新しい言葉を創り出そうとしているのだという。

ユーモアと並んで、Khiderが自分の経験に対して距離を取る手段のひとつが、ドイツに来てから身につけ、書く言葉として選んだドイツ語であった。「もしもこの時代について、あるいはアラブ世界について、アラビア語で書いていたとしたら」、「憤怒と悲嘆にくれていた」が、外国語で書くことで「内なる距離」ができる(Knapp, 2013, 10)のだ、と述べている<sup>1</sup>。

そして、Khiderの小説の語りの構造もまた、戦略的に用いられているように思われる。作家を「オルタナティブな歴史家」(Knapp, 2013, 8)と理解しているKhiderは、彼自身が体験したイラクの現代史を、西側のメディアやイスラム研究者が書くのとは異なる形で文学として語り直そうとしているといえる。このことを確認したうえで、以下ではKhiderの小説における語りの構造、そして、語りの戦略として用いられるユーモアの機能について分析していこう。

### 3. Khiderの語りの戦略

#### 3.1. 語りの構造

Khiderがこれまで発表した5編の小説において特徴的なのは、どの小説も一人称の語り手によって語られていること、そして複数の語りのレベル、あるいは枠構造をもっているということである。以下、5編の小説についてその語りの構造の特徴を確認しよう。

2008年に発表された最初の小説『偽インド人』は、枠小説の形式をとっている。冒頭の第1章、一人称の語り手は、ベルリンから乗車した列車の席でラスル・ハミッドなる人物の「思い出」と題された原稿が入った封筒を発見しそれを読み始める。8章で構成されるこの話中話「思い出」の中で、一人称の語り手ラスル・ハミッドは、その外見から生地バグダッドでしばしば「偽インド人」と呼ばれた自分の出自から語り始める。各章は独立した物語のようなまとまりをもち、現

在ドイツに滞在する「私」は、子供時代と自分の両親、読書や執筆への目覚め、逃亡中にノートや紙切れに書き留めてきた詩の度重なる喪失、政治犯としての逮捕、不法滞在者としての生活、ドイツへの到着、難民収容施設での生活、現在のドイツでの生活を語る。そしてこの「思い出」が完結したあとの最終章は、再び車中で原稿を発見した語り手のレベルに戻るのだが、列車でミュンヘンに到着し、同居するガールフレンドのもとに帰ったこの語り手は、一人部屋に座って混乱した心情を吐露する。

誰かが私の物語を書き、封筒に入れ、そしてよりによって列車の自分の席の横に置いたなんていうことが、いったいどうやったらあり得るのか。私の物語を盗み、そしてよりによってそれを私に届けるとはどういうことなのか。(Khider, 2008, 153)

この語り手が「私の物語」と呼ぶものは、彼自身の思い出であるばかりでなく、「書こうと思っていた形式」でもあるのだという。ここで読者は初めて、この語り手が、自分の体験を作品とすべく執筆に取り組んでいる人物だということを知る。翌朝、ガールフレンドは彼に「今日は、あなたの本を出版社に送るのよね。」(Khider, 2008, 153) と声をかける。アイデアを温めながら時間がなく書くことができずにいたという語り手は、「誰かが自分の仕事を引き取ってくれたことを喜ぶべきかもしれない。なにしろ、自分の物語が完成していて手元にあるのだから」(Khider, 2008, 154-155) と考え、小説の最後、この原稿を新しい封筒に入れ封をする。彼は、他人が書いた原稿を、自分の原稿として出版社に送るのだろうか。いや、彼が書いたものではないとしても、やはりこれは彼の「私の物語」なのだろうか。

この枠物語の謎、すなわち、この物語は誰のものなのかという問いは、体験や思い出だけでは「物語」は成立しないということを示しているといえるだろう。他人が書いた「私の物語」を読んだ語り手が途方に暮れたのは、その「語る形式」、すなわち自身の体験をどう物語として構築しようとしたか、その思考のプロセスも盗まれていたからである。この最終章によって、読者は、ここまで読んできたラスル・ハミッドの「思い出」がどのように語られてきたか、その形式に意識を向けることを要請されていると見てよいだろう。この物語を形作っているのは、西側の読者にとって時にエキゾチックなバグダッドの情景や、イラクからヨーロッパへの逃亡の途上に難民たちが経験する危険や困難といったドラマに満ちた体験だけではない。しばしば時系列が入り乱れ、経験や考察が行きつ戻りつしながら語られる物語の構造こそ、決して直線的に進行していくことのない逃亡者たちの生活を表現しているのである。故郷からの逃避行のプロセスを、距離をもって「思い出」として物語ろうとする語り手たち、すなわち、この小説の語り手と枠内の小説「思い出」の語り手両者のナラティブを構築する思考のプロセスこそが、この小説の柱である。

2作目の小説『大統領のオレンジ』(Khider, 2013[2010]) もまた枠小説であり、その冒頭はイラク・クウェート国境にある難民キャンプから始まる。2年間の牢獄生活を経てイラクを脱出した一人称の語り手は「言いようもない退屈」から自分の牢獄生活と拷問の経験について書き留めようとする。

この導入部分のあと、「マーディ・ハマーマ作 鳩飼いの男 本当のお話」とタイトルページが挿入されて物語が始まる。この「鳩飼いの男」の導入部分では、高校卒業試験の最終日、友人と車で出かけた「私」が突然逮捕される。第1章は「拘留 1989」と題され、「私」と友人が尋問を受け、刑務所での最初の夜を過ごす経緯が語られる。続く第2章は「バビロン 1980-1983」のタイトルで、場面が語り手の子供時代に変わり、父を戦争で失いながらも母親や近所の人々に守

られて過ごす日々が語られる。第3章は再び刑務所の時間に戻り、友人が拷問によって命を絶たれたことを聞かされ、語り手もまた継続して拷問に耐える様子が描かれる。このように、奇数章では語り手の刑務所での時間の流れが、そして偶数章では子供時代からの彼の生活の日々が語られていくという構成をとっており、読者は二つの時系列の物語を読むことによって、過酷で不条理な政治的迫害の状況と並行して、小さな村の日常生活、少年の友となった風変わりな鳩飼いの男の物語を読むことになる。刑務所での苦難の描写が続いたあと、少年時代の思い出と鳩飼いの男のエピソードが挿入されるこの規則的なリズムは、読者にとっては小説を読み続けるためのひとつの救いともなる。しかし、ここで想像するべきは、実際の政治犯の刑務所での生活は終わりが見えない（あるいは突然の死刑による終わりを恐れる）ものであったということであろう。

小説の終章において湾岸戦争が勃発し、政治犯たちは刑務所から解放されることとなり、その混乱の中で、語り手はイラクから脱出し、語られる時間は冒頭の枠の部分に戻る。そして、目的も希望も見えない、イラクからの逃亡の旅が始まるのである。

3作目の『ナス共和国行きの手紙』(Khider, 2013) は、創造譚のような風変わりな寓話から始まる。その寓話のあとの第1章には、「サリーム・カーティブ、27歳、土木作業員/1999年10月1日金曜日/リビア・ベンガシ」というタイトルがあり、イラクから逃亡しリビアに不法滞在するサリームが一人称で語る。彼は、日々、バグダッドにいるガールフレンドへの手紙を書くのだが、政治犯が手紙を郵便で送ることは、受け取り手の彼女を危険に陥れることになる。ある日、サリームはイラクへの密輸ルートの存在を知り、高額のコストを支払って一通の手紙をマフィアと思しき男に託す。1章の終わりでその手紙は、マフィアに雇われるタクシー運転手に手渡され、「第2章、ハイサム・ムルシー 54歳、タクシー運転手/1999年10月1日金曜日/リビア、ベンガシ」では、この手紙を託された運転手ムルシーが一人称の語り手となる。第3章ではカイロの旅行者へ、第4章では、ヨルダンのトラック運転手へと手紙が渡されていき、各章は、それぞれその運び屋によって語られる。密輸によって副収入を得る彼らは、日常生活、異国での仕事、残してきている家族について語り、また、政治、経済の状況を、時に皮肉をこめて笑い飛ばす人物たちである。リビアからいくつもの国境を越えてバグダッドに到着した手紙は、第5章で、当然この密輸ルートを把握しているイラクの秘密警察のもとに到着する。第5章の語り手となる検閲の任務をこなす警官は、この手紙は怪しいと考え、上官に報告して手紙を手渡す。そして、第6章は、この上官が語り手となる。警官、そしてその上官もまた、彼らの人生、家族について、また、彼らがフセイン下の政治体制にいかに対応し、任務をこなす、キャリアを築いてきたのか、その経歴と日常を彼らの視点から語るのである。逃亡者の視線で始まった小説が、国境を越えて働く運転手たちを経て、体制側の視線へと転換していくにつれて、読者は、体制側の人間たちもまた自らが生き延びていくために、暴力によって維持されているこの体制に迎合していくほかない状況にあることを知るようになる。

しかし、上官が自宅に持ち帰ったこの手紙は、偶然にその妻の手にあたり、第7章の語り手はこの妻となる。若くして秘密警察のエリートと結婚し、特権に守られた妻は、自分の夫の仕事についても、またこの国の抑圧体制についても何も知らずに生活している。そしてそれゆえに、このラブレターに書かれた引き離された恋人たちの運命に心を打たれ、自分でこの手紙を受取人の女性に届けようと決心するのである。バグダッドのもっとも貧しい地域にあるその住所を訪ねると、くだんのガールフレンドはすでに国外にいるという。そこで上官の妻は、その手紙に火をつけるのだが、最後に次のような文言を目にする。

私たちの物語に信憑性があるとすれば、それはおそらく、信じるに値するとも、信じるに値しないとも言えない、ということだ。この物語は、つまるところ、メソポタミアのお話の一つにすぎないのだから。(Khider, 2013, 155)

この手紙からの引用はそのまま小説の最後の文章となっており、読み進めてきた読者は足元をすくわれたように感じる。「信じるに値するとも、信じるに値しないともいえない」ものとは、ある日突然政治犯としてとらえられ亡命を余儀なくされた若者の、お互いの消息も長くわからない恋人との、かつてのイラクで共に過ごした日々のことをさしているのだろうか。それとも、不思議な創造譚で始まったこの小説全体、各章を語ってきた国外で働く運転手たちや、あるいはイラクの独裁体制を支えた軍人や警官たちの日常が、「メソポタミアのお話の一つ」に過ぎず、その「信憑性」が疑問に付されているのだろうか。

このような仕掛けは、作者Khiderの、自分の作品の受容のされ方への意識的な応答であるように思われる。この小説が、複数の語り手によって語られる複層的な物語でありながらも、とくにその主軸となる「手紙」について、彼の自伝として読まれうることをおそらくKhiderは想定していただろう。小説の最後に置かれた「物語の信憑性」をめぐるこの仕掛けは、こと当事者の物語について、作者と作中の語り手を同一視しがちな西側読者に対する皮肉を含むサインであって、この小説のフィクション性を強調するものだと解釈できそうである。西側の読者にとっての「メソポタミアのお話」とは、「千夜一夜物語」に典型的にみられるような複数の語り手が登場して語る枠物語であり、エキゾチックなものとして「きっとそうなのだろう」と信じられ、同時に、荒唐無稽な、すなわち信憑性のないものとして考えられている物語である。

このように、読者に対して物語のフィクション性を強調するKhiderであるが、執筆にあたっては、フセイン政権下で秘密警察であった者へのインタビューや調査も行うなど<sup>2</sup>、語られている状況の真正性を重視している。フィクションであるが現実起きたことを書き、創造されたものであるが自伝的なものである物語を構築するKhiderのナラティブは、この作品においては、複数の語り手の複層的な語りとして、そしてさらにそのすべてのフィクション性を強調する終結部によって、表現されているといえる。

4作目となる『平手打ち』(Khider, 2016)は、難民として庇護権申請をする人間の視点、難民収容施設の内側からドイツの社会を描いているものである。小説の冒頭、外国人局の窓口に来た一人称の語り手は、職員の女性をガムテープで椅子に縛り付け、またその口もガムテープでふさぐ。「シュルツさんよ。話し合おうって言ってんだ。ずっと俺はそう思っていたのに、あんたには時間がなかったからね」(Khider, 2016, 10)。ホスト社会の中で声を持たない難民が自分の物語を語る場は、印象的に、外国人局職員の口をふさぐという形で設定される。個々の外国人の物語をこれまで聴くことのなかった役所の職員を前に、語り手カリムはゆったりと時間をとり語り始める。ようやく語る場を得た難民である「私」は、イラクでの、そしてドイツでの生活について、抑制的に、しかし雄弁に、仔細に語り続ける。

当事者のナラティブについて考察するうえで興味深いのは、ドイツにおいて庇護申請をする難民たちと「物語」の関係である。難民たちが庇護申請において語る物語は、その申請の可否を決定するものである。必然的に彼らは、国連の難民条約、EUのダブリン条約、出身国と受入国の情勢に合わせて物語を語ることにたけていくようになる。滞在許可を得るには「大物の上手い嘘つき」(Khider, 2016, 73)になることが必要なのだ。語り手であるカリムもまた、学校時代、授業中にフセインについての冗談を言ったため連行された同級生の話を盗み(Khider, 2016, 109)、

「それが本当の話だと自分が信じるまで」(Khider, 2016, 75)、頭のなかで反復する。カリムのこの創られた物語は、滞在許可申請の公的な審査の場で語られ、公的な文書に記録され、そして、遅く「本当の話」と認定されることになるのである。

縛り上げた外国人局の役人に向かってこのような難民申請のトリックについてまで語っているこの状況は、語り手自身が述べているように「キリスト教の懺悔」(Khider, 2016, 10) のようでさえある。この小説の大部分を占める外国人局職員に向けて語られる物語が「懺悔」に似た告白なのだとするならば、彼がここで語る半生、ドイツ入国の過程、難民収容施設に住むさまざまな問題に直面する難民たちの状況は、信憑性のあるもののように思える。

しかし、この「懺悔」の信憑性もまた Khider の語りの構造によって疑問に付される。この語り手は、外国人局職員の前で語っている合間にもしばしばハシッシュを吸っているのだが、ところどころに挿入される斜字体で書かれたページの語りにおいて、彼は明らかに酩酊状態にあり、幻覚、記憶、言葉のコラージュを始める。小説は、この酩酊した語りで終わりを迎える。

おい、シュルツさんよ。どこ行ったんだ。逃げたのかよ。まだ終わってないんだよ。どこに隠れたんだ。アラーと全ての天にいるクソ野郎に誓ってやろう。いつかあんたをつかまえて、平手打ちを食らわせてやる。(Khider, 2016, 220)

この小説の結末で、どうやらこの語り手は、外国人局職員を前にしているわけではなさそうである。そして、読者は、ここまで読み進めてきた難民の物語にどこまで信憑性があるのかという問いにぶつかることになる。同時に、ここにはいくつかの解釈の可能性が開かれてもいる。すべて語り手カリムのハシッシュによる幻覚か夢にすぎないという読み方もできるが、酩酊状態において語られているからこそ、今まで誰にも語るができなかった「真実」に近い物語であると推測することもできる。あるいは、難民たちが「大物の上手い嘘つき」として彼らの物語を語るように、ここで語られた内容も「上手い嘘」だともいえるだろう。では、この「嘘」を通して、語り手は、政治難民の物語を読もうとする読者の期待に寄り添おうとしているのだろうか。それともむしろ、その期待を裏切ろうとしているのだろうか。この点については後述したい。

最新作である『みじめな者たちの宮殿』(Khider, 2020) は、語り手が拘束されている刑務所のシーンから始まる。「僕の見張りが深く眠り込んでいる」(Khider, 2020, 7)、独房にいる語り手はこのように現在形で語り始める。「逃げられるだろうか」としばし語り手が考える短いプロローグのあと、第1章からはこの「私」の少年時代が語られる。イラン・イラク戦争さなかの1980年代初頭から2003年イラク戦争勃発の時期のイラクを舞台にした16章からなるこの小説は、少年の成長の過程を描いている。クウェート侵攻に続き湾岸戦争が勃発した時期、少年の家族はクウェート国境近くの村からバグダッドに移住しバラックが並ぶ貧民街を生活の場とする。湾岸戦争終結後、イラクが国際社会から経済制裁を受ける中、その影響をもっとも受けた貧しい環境の中で、この少年と家族はそれぞれに知恵をしばりながら生き延びていく。この成長譚が語られる各章の合間には、プロローグで語られた時間、すなわち「刑務所の中の現在」の語り手挿入され、この少年の「その後」が予言される。思春期を迎えた少年は、書物を読む楽しみを知り、書籍市に足繁く通い、知識人サークルに出入りするようになる。そして、政権を批判する議論、国内では禁禁である亡命イラク人作家の作品についての討論を通して、新しい世界、社会の見方を知ることになるのである。しかし、この国では、この知的好奇心こそが危険につながる道であることが、挿入される刑務所の場面で示唆される。2003年のイラク戦争下、他の収容者

の気配もなく、監視者も、パンを配る見張りさえも姿を現さなくなった地下独房に「私」はひとり残され、その言葉はどんどん短くなっていく。一方、少年の成長過程を追ってきた本文最終章の16章では、「私」がとうとう逮捕され拷問を受け、出版禁止本の販売に携わっていたことを自白する。そして、最後のページでは次のように、語り手の最期が示唆される。

ドアまで這っていく。寝込んでしまう、耐えろ。もう終わりだ。今日を閉じたら、二度と目は覚めない。(……) 手を持ちあげ、こぶしを握り締め、ドアを叩く。(Khider, 2020, 319)

この作品では、これまでの小説で確認したような事実の信憑性を覆す語りの仕掛けはみられない。むしろ、「刑務所の中の現在」が各章のあとに挿入されることによって、少年の成長の道が行きつく先が示唆されており、少年がその運命にはあらがえないことが読者には明らかにされているといえる。

ここまで、Khiderの5つの小説について、語りの構造に注目して確認をしてきた。どの小説も、一人称の語り手である「私」、すなわち当事者自身によって語られるが、特徴的なのは、枠物語の構造(『偽インド人』、『大統領のオレンジ』、『平手打ち』)、複数の語り手(『ナス共和国への手紙』)、並行して語られる複数の時系列(『大統領のオレンジ』、『みじめな者たちの宮殿』)、語り手の意識状態の転換(『偽インド人』、『平手打ち』)によって、語られる内容が唯一の事実としてではなく、複層的な時間の、そして複数の視点から語られた事実として相対化されていることである。宛先に届かず燃やされてしまう逃亡者の手紙や長距離運転手の語り(『ナス共和国への手紙』)、ハシッシュによる酩酊状態にある難民申請者の語り(『平手打ち』)、人知れず獄中で餓死しようとしている政治犯の語り(『みじめな者たちの宮殿』)のように、Khiderの小説で語られるのは、公式の言説には残らない人々の物語である。実際にそのような状況を自ら体験してきたであろうKhiderという作家によるこの物語には、一定の当事者性、真正性、信憑性があるといえる。難民生活や政治亡命をする必要性が身近に迫っていない西側読者たちは、当事者が語るこれらの物語を、「真実」として受け止めようとしてしまいがちである。

一方、Khiderの小説には、語り手自身が語った内容について疑問をもち、その信憑性を揺るがす発言をする、いわゆる「信用できない語り手」も多く(『偽インド人』、『ナス共和国への手紙』、『平手打ち』)、彼らによって語られた物語は、「ありえたかもしれない」、あるいは「なかったかもしれない」ものとして提示される。それは、自ら当事者であるKhiderが、経験した事実をただ提示するのではなく、それをもとに創り上げたフィクションのナラティブとして提示しようとする戦略であろう。それによって読者は、ここで語られている強烈な体験の物語を受容しながら、しかし同時にそれを相対化し、「ここに語られた通りでなかったかもしれない」別の可能性についても考察するように誘われる。

このような語りの戦略によって、Khiderは、さまざまな難民たちの体験がひとつの典型的なエピソードとして消費されることに抗い、また西側メディアによって喧伝される「独裁政権下で迫害される被害者」のステレオタイプを脱構築しようとしているように思われる。そのことを、次節では、Khiderの作品におけるユーモアあるいはアイロニーに注目しながら確認してみたい。



### 3.2. ユーモアあるいはアイロニー

『ナス共和国への手紙』は、そもそもタイトルにある「ナス共和国」がひとつのジョークである。この小説では、第4章でサリームの手紙を手にするイラクのトラック運転手が次のように語っている。

禁輸措置以来、私らのところじゃ食べるものも選べない。もうずっとナスしか食ってないよ。イラクの若者たちが国に新しい名前をつけたくらいだ。「ナス共和国」さ。(Khider, 2013[2010], 79)

この「ナス共和国」宛ての手紙を書いている第1章の語り手サリームが刑務所で出会った、拷問を巧みに回避した男の話は、強い印象を残すものでありながら、体制側の官吏たちを笑い飛ばそうとする政治犯のしたたかさを感じさせるエピソードである。イスラム政党での活動が理由で逮捕されたこの男は、噂に聞く拷問によって仲間を裏切ることが恐れ、これを回避する策略を練る。彼は、数日間排便をこらえて尋問の日を待つと、警棒による殴打が始まったところで脱糞し役人たちを狼狽させる。「それ以来、あいつらのほうが、俺がまた垂れ流すんじゃないかって恐れ」(Khider, 2013 [2010], 20)、彼が拷問を受けることはなくなるのだ。この経験話をしながらこの男は、尋問官たちを「怖がりの、からっきしの根性なし」(Khider, 2013 [2010], 19)とあざける。もちろん、ここで描かれているのは、むき出しの暴力の中、心身を守るために人間の尊厳を捨てるという究極の状況である。一方、この糞尿譚が暴くのは、拷問を行う役人たちもまた究極の状況の中に置かれ、拷問する相手に対して、また拷問を命じる体制に対しての恐怖に支配されているということであり、それを笑い話とするこの男の語りは、まさにそのような体制側の不安を、皮肉とともに描写しているのである。

Khiderのユーモアやアイロニーの標的になるのは、イラクの体制だけではない。『平手打ち』の語り手が打ち明けているように、難民たちは滞在許可を得るために「自分の人生を創作する」(Khider, 2016, 75)のだが、その知恵を共有し合う難民たちの軽妙で饒舌な会話は、ヨーロッパ、ドイツの難民受け入れ政策への批判でもある。彼らの果たすべき目的は、難民審査官に、故国では生命の危険に脅かされていること、ドイツ入国前に他のヨーロッパ諸国に足を踏み入れていないことの2点を納得させることである。「もちろんみんなが政治活動をしていたわけではない」が、抵抗勢力に協力をしていたというのがもっとも通りがよく、「一番基本的なルールは、決して真実を話さないこと」(Khider, 2016, 72)である。このように語り手に知恵を授けている男は「俺はサダムから逃げたわけじゃない。おやじから逃げた。おやじが独裁者だったんだ。」(Khider, 2016, 73)と仲間に明かし、申請手続きでは「作家になろうかと思った」というほど「ハラハラする話」を創り出す。独裁政権下のイラク出身であれば申請が通りやすくなれば出身地も偽るのが戦略であり、その状況は「イラクの外ではイラク人の人口が増加中」(Khider, 2016, 74)とジョークで語られる。ここで語られる難民申請者たちの生き延びるための戦略としての「嘘」は、官僚的、恣意的でもあるヨーロッパ、そしてドイツの難民受入政策への皮肉であると解釈できるが、難民受け入れをめぐるドイツの世論を逆なでする危険もあるだろう。

この小説が出版された2016年は、その前年にドイツが100万人近い難民申請者を入国させ、受入の是非、難民たちの社会的統合の可否について世論が大きく割れていた時期であった。Khider自身は、2001年の連続多発テロ以降のイラク難民の状況を描いたこの小説は、2015年の難民受入をめぐる議論が高まったころには書き終えていたと述べているが(Encke, 2016)、出

版直後は、現在進行形の難民問題との関連で議論されることになった。当時のドイツは、人道的に難民を受け入れようとする運動も大きなうねりとなった一方、明らかに行政能力を越えた数の難民が入国してきたことで社会問題につながった側面もある。人々の不満を煽る極右政党がこれを機会に勢力を伸ばし、排外主義的な言説が標榜されようにもなった。難民受入に反対する勢力が、ヨーロッパをめざす人々は「難民」ではなく、経済的理由で移住する「不法移民」であるという主張も繰り返していた中、まさに、このKhiderの小説に登場する難民申請者たちは、「嘘」によって「難民」としての滞在資格を得ようとしている人たちである。

語り手の「私」の亡命の本当の理由もまた、縛り上げた外国人局の職員に向けての「懺悔」に似た状況でしか語られない。「私」が思春期を迎えた頃、体に異変が起き、女性の乳房が発達するという状況に陥る(Khider, 2016, 78)。自分の身体の変化にショックを受けた彼は、親や家族、友人にもこれを隠し、秘密が明るみになることへの恐れから、兵役を逃れるために国外に出ることを決心する。ヨーロッパで大学に行き、外科手術を受け、男性としての普通の生活を手に入れること(Khider, 2016, 93)、この個人的な、しかし人生にとって根本的な問題から逃れることが、彼がイラクを離れた理由だったのである。しかし、ドイツにおいて難民申請の可否を判断する行政システムに、この理由はあてはまらない。そこで、語り手は、庇護権認定の審査にあたって「嘘」の経歴を創り出したのである。

語りの中で明かされた「本当の理由」は、政治亡命の物語を読もうとしている読者にとっても意外な仕掛けとなる。小説のプロットとして、あるいは語りの仕掛けとして、この意外な亡命の理由はどのような機能をもっているだろうか。Khiderは、なぜカリムのイラクからの逃亡の理由を、女性の乳房ができたという突拍子もないように思える理由<sup>3</sup>としたのだろうか。西側読者、とくに難民問題に関心を持ち、Khiderの作品を手取るような読者こそがもっている「独裁政権で政治的自由を侵害されて苦しむ人々」というステレオタイプに対し、Khiderは、このカリムのエピソードによって、別の、また多様な亡命の理由を提示しようとしていたように思われる。難民が審査の際に語るのが、相手の期待の地平に合わせた「嘘」であるとすれば、Khiderがここで書いている物語は、読者の期待の地平をずらせて見せるためのアイロニーだといえるだろう。

#### 4. 結論に代えて：ナラティブの宛先

ここまで見てきたように、Khiderの小説は、その語りの構造によって、唯一の現実、絶対的な真実を固定化することを注意深く回避しつつも、当事者の経験を語り伝えることによって、読者を、ヨーロッパをめざす難民、政治亡命者、またイラクに対してもっているステレオタイプについて、立ち止まって反省的に考察することに誘う。そして、このドイツ語で書かれたテキストが想定している読者は、一義的には、EUの政治と経済を牽引し、難民を受け入れるホスト社会としてのドイツの読者たちである。

最新作である『みじめな者たちの宮殿』は、そのナラティブが二つの時間軸をもちながらも一人の「私」、若さとその環境から社会経験は限定されていながらも比較的信頼できる語り手の視点で語られ、物語の信憑性への疑義を示すような戦略については抑制的だといえる。その中で印象的なのは、登場人物の言葉が、しばしば明らかに西側読者に向けられていることである。主人公のカマルが参加するようになった読書人のサークル「みじめな者たちの宮殿」に集まっていたメンバーは、政治弾圧が激しさを増す中、ひとり、またひとりと国外に逃亡する。亡命を決断した友人に、カマルは少年らしい純粋さをもって「私たちの物語を書いてくれ。」「世界はこの国

で実際に何が起きているのかを知るべきだ」(Khider, 2020, 255)と伝える。しかし、その年長の友人は「外の人たちが僕たちの問題なんかに関心があると、本当に思ってるのか？」と切り返す。イラクで起きる戦争など西側の人間にとっては、「新聞の速報の見出し」でしかなく、「僕たちの物語は、ウィーンやチューリッヒの暖かいカフェで居心地よく座ってクリームたっぷりのケーキをコーヒーで飲み下しているような人たちにとってはかゆくもない」、「新聞を閉じたら、もう忘れてしまう」(Khider, 2020, 256)のようなものなのだ、と。

この小説の語り手の少年が、オルタナティブな議論に出会うことで明確に認識するようになったフセイン下の非人道的な体制は、西側先進国の軍事攻撃と経済制裁によってさらに堅固なものとなり、その下でもっとも困窮する人々の物語は「暖かいカフェ」に座っている人々には届かない。しかし、その声は、当事者である書き手Khiderが、フィクションとして創作した当事者たちの声として、また文学テキストとして、ドイツ語でここに差し出されているのである。

冒頭にも述べたように、文学テキストもまたコミュニケーションのひとつの手段であるといえるが、コミュニケーションは、受け取る相手がいて初めて成立する。文化人類学者の小田(2009)は、日本の北海道において、アイヌのナラティブが公の場で聴かれていないことを指摘しながら、ナラティブの力をもつ可能性について、逆説的ではあるが次のように述べている。

「私に関係がある」と捉えるとは当事者性の自覚である。傍観者が当事者になるために、自己と他者とを関係づけるナラティブの力を用いることができないであろうか。人種差別を成立させている社会構造には、被害者の<sup>ナラティブ</sup>声を抑圧するという仕掛けが組み込まれている。(小田、2009、48)

それでは、これまで聴かれてこなかった、抑圧されまた忘却された少数者の声が聴かれる公の場、そのような場を創り出そうとする社会の姿勢はどのように作られるのだろうか。「傍観者が当事者になる」ためには、「自己と他者を関係づける」ナラティブを受け取る必要がある。文学テキストのナラティブは、公の場の語りとは異なる形で読者に届けられる。さらに、想定されたドイツ語圏の読者だけでなく、翻訳によって、言語や空間を大きく越えることもあり得るだろう。そのようにして、作家や語り手の「今とここ」を越えて、さまざまな場に届けられる文学テキストのナラティブは、読者が、当事者との関係を構築する可能性、いつかこのナラティブになんらかの応答を示すことを促す可能性を、わずかながらもっている。もちろん、そのナラティブの力を受け取り、そこから関係性を創り出すべきなのは、読者の側である。

#### 註

1. ただし、同じ2013年の別のインタビュー(Kretschmer, 2013)では、「ドイツ語は自分に近いものになり」、「距離はもうそれほどない」とも答えている。2019年、ドイツ語をめぐるKhiderのエッセイ『みんなのためのドイツ語』(Khider, 2019)出版告知の一環としてライプツィヒ書籍市において行われた公開インタビュー(MDR KULTUR, 2019)では、書く言葉としてドイツ語を選択したことは非常に苦しい決断であった、一方で、フセイン政権崩壊後の2003年にイラクに一時帰国した際、望んでいた帰郷でありながら、政治的混乱や内戦によって自由な文化活動が不可能な状況に直面し、アラビア語とは縁を切りたと思った、ドイツ語は自分にとってのホームとなったと述べている。ただし、ドイツ

- の書籍市場における最大のイベントにおける自著の広報の一環でもあった公開インタビューでのこの発言には、ある程度のリップサービスが含まれているであろうことは考慮するべきであろう。
2. Khiderは執筆のために、フセイン政権において体制側にいた秘密警察や拷問にかかわった警官などにも会って調査を行った。その調査について、「彼らが自分がしたことに確信を持ち、間違っただけでなかったと納得しているのを聞くのは苦痛だった」が、確認できたのは、「彼らもまた私たちと大して変わらない」ことだったという。そして次のように述べている。「独裁政権下の秘密警察であれば、命令に従わなければ職を失う。拷問しない者は拷問を受けるのだ。サダム・フセイン下のあの構造では、その中でともに生きていくしかない。あそこでの生活はそういうものだったのだ。そして、それを私は文学として表現しようとしているのだ。」(Knapp, 2013, 11)
  3. とは言え、Khiderによれば、この「女性化乳房症」は60%をこえる思春期の男性に見られる症状なのだという(Khider, 2016, 92)。

#### 【一次文献】

- Khider, Abbas (2008), *Der falsche Inder*. Hamburg: Edition Nautilus.  
 Khider, Abbas (2013 [2010]), *Die Orangen des Präsidenten*. München: btb Verlag.  
 Khider, Abbas (2013), *Brief in die Auberginenrepublik*. Hamburg: Edition Nautilus. キダー、アバス (2018) : 「ナス共和国行きの手紙」(浜崎桂子抄訳)『三田文学』134, 162-182.  
 Khider, Abbas (2016), *Ohrfeige*. München: Hanser.  
 Khider, Abbas (2019), *Deutsch für Alle*. München: Hanser.  
 Khider, Abbas (2020), *Palast der Miserablen*. München: Hanser.

#### 【二次文献】

- Cakir, Berkan (2015 Januar 29). Das Grauen in Heiterkeit umdichten. *stuttgarter-zeitung.de*. <https://www.stuttgarter-zeitung.de/inhalt.schriftsteller-abbas-khider-das-grauen-in-heiterkeit-umdichten.c074671f-7622-42d5-b35a-510164f3e8e6.html> (最終閲覧：2020年9月26日)
- Encke, Julia (2016 Januar 30 [2016 Januar 24]). Flüchtlingsroman: Vom Warten wird man immer blöder. Der deutsch-irakische Schriftsteller Abbas Khider hat einen Roman über einen Asylbewerber geschrieben. Mal wieder „das Buch der Stunde“? Oder ein sehr guter Roman? *Frankfurter Allgemeine Zeitung*. <https://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/fluechtlingsroman-vom-warten-wird-man-immer-bloeder-14030679.html> (最終閲覧：2020年9月27日)
- 浜崎桂子 (2018). 「解説：アバス・キダーと多文化社会ドイツの文学」『三田文学』134, 183-188.
- 長谷川貴彦編 (2020). 『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店.
- Khider, Abbas, Mayer, Christian & Salavati, Nakissa (2020 April 17). „Ich muss Geld bei mir haben“. Der Schriftsteller Abbas Khider saß im Gefängnis, floh aus dem Irak, studierte Heidegger in Deutschland. Er erzählt, wie er sich mi Jobs auf Baustellen in Libyen durchschlug und warum er zwanghaft Bares in der Hosentasche trägt. *Süddeutsche Zeitung*, S. 20.
- Knapp, Alexa (2013). Der Preisträger 2013 im Gespräch. „Aber die Literatur gehört uns nicht. Sie ist wild. Und geht gern fremd. Und das ist in Ordnung!“ In Stadt Heidelberg Kulturamt, *Hilde-Domin-Preis für Literatur im Exil für Abbas Khider* (S. 6-12). [https://www.heidelberg.de/site/Heidelberg\\_ROOT/get/params\\_E2036308203/458253/Domin\\_innen2013-low.pdf](https://www.heidelberg.de/site/Heidelberg_ROOT/get/params_E2036308203/458253/Domin_innen2013-low.pdf) (最終閲覧：2020年9月27日)
- Kretschmer, Katharina (2013 September 9). Abbas Khider aus dem Irak im Interview. „Die Literatur kann den Menschen eine Stimme geben, die keine haben.“ *Zenith-Online*. <https://magazin.zenith.me/de/archiv/autor-abbas-khider-aus-dem-irak-im-interview> (最終閲覧：2020年9月27日)
- MDR KULTUR (2019). Abbas Khider im Interview über „Deutsch für alle“. Leipziger Buchmesse, 2019.3.24, <https://www.youtube.com/watch?v=SShB4cN7q1k> (最終閲覧：2020. 8. 23)
- 灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津 (2014). 「質的研究方法について考える——グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、アクションリサーチを中心として——」『異文化コミュニケーション論集』第12号, 67-84頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科.

- 野口裕二 (2009). 「ナラティブ・アプローチの展開」野口裕二 (編)『ナラティブ・アプローチ』(pp. 1-25). 勁草書房.
- 小田博志 (2009). 「エスノグラフィーとナラティブ」野口裕二 (編)『ナラティブ・アプローチ』(pp. 27-52). 勁草書房.